

風穴 眞悦（かざあな・しんえつ）

1、プロフィール

高校教員として優れた研究と実践をしながら、学生時代からのライフワーク「地方文学史の研究」を続け、多くの研究成果を残した近代文学研究者。

<生没>

1931(昭和6)年7月25日～2000(平成12)年11月19日

<代表作>

『地方文学史愁々』(昭和59年3月3日発行)

『地方文学史泣々』(平成13年4月10日発行)

<青森との関わり>

現上北郡下田町字境田18番地1号に生れる。八戸高校を経て弘前大学教育学部卒業。県内の高校教員を歴任す。

2、作家解説

昭和6年、上北郡下田村(現下田町)に、村役場職員の父石太郎と雑貨商を営んでいた母なんの長男として生まれた。

弘前大学在学中から詩人・大塚甲山遺稿集の翻刻と作品の収集を通して、文献の学問的処理や実証的研究の方法を学ぶ。昭和34年には「青森県郷土作家研究会」(代表小山内時雄)創立に力をつくした。また、中央では「近代文学懇談会」や「日本社会文学会」「日本近代文学会」他の会員として活躍をしている。

研究論文には初期の「淡谷悠蔵論」他があるが、特に雑誌「郷土作家研究」に昭和34年以降掲載された数多くの論文は、地方文学史の方法の確立という遠大な計画を持ったもので、中央学界においても高い評価を得た。なお、これらの緒論は『地方文学史愁々』(昭和59年発行)としてまとめられたが、第二次大戦前の社会主義者を中心にしてその失意や挫折、転向の経緯にも鋭いメスを入れている。これに続いて、戦争と文学についての視点を深めていったものが二作目の『地

方文学史 沘々』(平成 13 年発行)である。盧溝橋事変前後の社会状況と、犠牲の多かった地方出身の兵士や遺族などを克明に調査し、文学と真実の追究を試みたものといえよう。

風穴真悦の思考とその論述は、研究対象や遺族には絶対に会わぬことを基本においていたようである。学術書は勿論のこと新聞記事、日記、書簡等、能う限りの資料をたどり、個々人の政治や思想上の立場からゆがめられた事実を明らかにして、真実と信じるもののみを提示するというものであった。

平成 12 年 11 月、肺ガンのために数度にわたる入退院のくり返しの果てに、生涯をかけた論著の初校を手にしながらかこの世を去っていった。「沘々」(涙の激しく流されるさま)とは多くの兵士やその遺族のみではなく、自分自身への涙でもあったのか。

3、資料紹介

○『地方文学史 沘々』

図書

2001(平成 13)年 4 月 10 日

190mm × 140mm

文学史を地方の視座から論じた好著。日中戦争勃発前後の社会情勢と、戦争の犠牲となった本県出身の兵士やその遺族に視点を当てながら、侵略者と被侵略者の心情から、戦争の現実と新聞報道の欺まんにいたるまでを書簡や日記類から証している。